

---

## 『クレーム事例から学ぶ革の特性26』

### 革のメンテナンス (3)

NPO法人日本皮革技術協会 稲次俊敬

---

#### 1. はじめに

これまで革・革製品のクレーム事例を紹介しながら革の特性について説明してきた<sup>1)</sup>。前々回からは革製品、特に、革衣料のメンテナンス・クリーニングに関わる事例について取り上げている。その中で、革や製品に問題のあったもの、メーカーの品質管理や企画、ものづくりに関するもの、メーカーや販売店の情報、説明不足、消費者の取扱方法や保管方法に問題があったもの、クリーニングによって生じた事例などを紹介し、今後の皆様の業務において同じ過ちを繰り返さないための情報提供となれば幸いである。

#### 2. 革衣料品のドライクリーニングに関するクレーム

今回は、部分使い衣料品、すなわち、革と繊維など異素材の組合せ衣料をクリーニングした時に生じた様々な事例を紹介する。

##### 2.1. 異素材組合せ衣料の色の移行

**事例1**：革を部分使いしたロングコートをクリーニングしたところ、革の色が布帛を汚染した(写真1)<sup>2,3,4,5,6)</sup>

**申出**：革の部分使い衣料品をクリーニングしたところ革の周辺部分を中心に黒色に汚染してしまったと連絡があった。クリーニング店からは補修は難しいので、弁償をすると申出があった。大変気に

入っていたので、購入店に同様の商品は残っていないか尋ねたが、販売後数年経過しており、在庫はないという。

**外観観察**：婦人用ロングコート(青)の本体は綿製で、繰り返し部分に黒色の革を縫い付けた製品である。クリーニング後、革から黒色の色素が溶出し本体の綿が黒く汚染されていた。

**原因**：クリーニング店からの聞き取り調査では、革の部分使い衣料品を通常の繊維製品と同様の工程でドライクリーニングを行ったという。その結果、部分使いの革(黒)が綿製の本体を汚染した。この黒く汚染した個所について、シミ取りを試みたが、完全に除去することはできなかったということである。これは、ドライクリーニング溶剤によって、革中の黒色染料が溶出し綿製の本体を汚染した、すなわち色泣き(ブリード)現象である。革の染料が溶出し綿に移行して染着している。これを取り除こうとすると本体の青色の染料まで除去してしまう可能性が高いので、この黒い染料のみを取り除くことは難しいと思われる。

クリーニング店は革を取り外し、革と本体を別々にして洗うべきであった。革を取り外すことができないなら、衣料全体を有機溶剤に浸漬するような洗い方は避けるか、あるいは、そもそも洗うべきではなかった。

**対策：**このような異素材組合せ衣料を企画・縫製する場合は、消費者のメンテナンスを考慮して、部分使いの革を取り外せるような作りにする。アパレル業界は革を使うことによって付加価値が高まり高価格帯に設定することができることにのみ注力しがちであるが、あわせて染色堅ろう性の確認を怠ってはならない。このため、革の特性をよく知ることと革の品質チェックを怠らないこと。たとえば、事前に採用する革と本体の素材とをセットにして、JIS K6552に定められたウェットクリーニング試験やドライクリーニング試験を実施し、これらの組合せの性能を評価しておくべきである。また、安易に革を採用しないこと。採用する場合は耐洗濯性の高い革を用いること。タンナーは用途をよく確認してメンテナンスまで考慮した耐溶剤性の革づくりを行うこと。革問屋は安易に用途替えをしないこと。

クリーニング業者は洗えるものと洗えないものを的確に判断すること。消費者に対して異素材組合せ衣料のクリーニングの難しさを伝えると同時に、革の特性について十分に説明して納得してもらえよう知識を習得すること。部分使い衣料については、革を取り外して洗うか、何等か革をガードした洗い方等を工夫すること。

やむを得ずこのような商品をクリーニングとして預かった場合には、有機溶剤に浸漬せずにせいぜい拭き洗い程度に留めておくことも選択肢のひとつである。

また、受付点検時に洗えない商品であるかどうかを的確に見極め、場合によっては、クリーニングできないことを依頼者に伝えることも肝要である。

**事例 2：**革の飾り紐のついた衣料品をクリーニングしたところ、革の色が衣料品を汚染した（写真2-1, 2-2, 2-3）<sup>2,3,4,5,6)</sup>

**申出：**革の飾り紐のついた羊毛製の衣料品をクリーニングに出したところ、裾周りや袖口周辺を中心にうす黒く汚染した状態で納品された。紐に使われている革から色が落ちたように思われた。クリーニングの取次店からは、このような堅ろう度の低い革を使用したメーカーが悪いと言われた。苦情はメーカーに言うべきでしょうか、それとも、クリーニングした所に言うべきでしょうか。クリーニングに出す前の状態に戻してほしいのですが、元どおりにはならないのでしょうか。

**外観観察：**この衣料品は申出どおり、本体は羊毛製（はだいろ、ライトオレンジ）で、裾を絞り込むことができるように革紐（こげ茶色）がついている仕様になっている。この革紐は植物タンニン鞣し革である。クリーニング後、裾周りや袖口を黒く汚染しているのが認められた。革紐も硬く縮んでいるように思われた。

**原因：**異素材との組み合わせ革衣料というより飾り、あるいは付属として革紐が適用された製品である。このような製品をそのままクリーニングすると、事例1と同様に、やはり色移行（汚染）の問題が起る。また、この種の革はもともと耐熱性が低い。クリーニング溶剤により革中の加脂剤が溶脱し、クリーニング時の熱的作用などによって収縮・硬化したものである。

このような状況になることは、経験豊富な皮革専門のクリーニング店では十分に想定できるので、通常、革紐を本体から取り外してクリーニングしている。万一、取り外しができない場合には、革紐をアルミ箔などで包み込んで色落ちを

防ぐ対応をして洗う。あるいは、洗えないと判断した場合には、できないと断るようである。そのためには、受付時か洗う前に行く被洗物の選別時に、どのような対応（洗い方も含む）をするべきかの確かな判断ができなければならない。このような対応ができないなら、皮革衣料専門（クリーニング）業者に取り次ぐべきである。

**事例3**：綿製の衣料に部分使いの革から色が移行した（写真3-1, 3-2）<sup>2,3,4,5,6)</sup>

**申出**：綿製の衣料（白）に部分使いで革が使われている衣料をクリーニングに出したところ、革の色が白い綿を汚染した状態で納品された。皮脂などの汚れはきちんと取り除かれていたが、茶色い革の色と思われるものが白い綿生地に移っていた。色落ちと思われる。これでは洗ったとはいえないのではないかと取次店に苦情を申し入れた。

**外観観察**：綿製の衣料（白）に襟周りとお胸ポケットのかぶせ部分、ポケット口に部分使いで茶色の革が縫い付けてある仕様である。襟周りに縫い合わせてある革から溶出した染料が裏地の布帛を汚染していた。さらに、肩部にもその染料が拡散して汚染していた。

**事例4**：フード付きの防寒コートをクリーニングしたら、部分使いの革が色泣きした（写真4-1, 4-2）<sup>2,3,4,5,6)</sup>

**申出**：毛皮のフードのついた防寒コートをクリーニングに出したら、衣類全般に亘って薄汚れた感じがしていた。どうも革の色が染み出ているようだ。とてもクリーニングしたとは思えないので、受取を拒否した。

**外観観察**：フードに毛皮がついていて、ポ

ケット口、袖口、裾まわり、前身頃の合わせ部分のそれぞれに同じこげ茶色の革が縫い付けてある仕様である。申出どおりそれぞれの革の周辺に色の移行（汚染）が確認された。革は塗装仕上げの牛革であった。なお、表地（本体）の素材はナイロンであった。

**原因**：事例3、4ともに革を部分使いした異素材組合せ衣料である。いずれの場合も、革の部分を取り外すことができないし、革の使用面積も小さいので、そのまま繊維製品のクリーニングを行ったという。耐ドライクリーニング性の低い革を使用したために生じた事故と思われる。革の部分を取り外して別々に洗えば防げた事故である。

少しでも革が使用されていれば、革衣料として分類し、皮革衣料専門業者に取り次ぎ、その専門業者に、洗えるか洗えないかの判断を委ねるべきである。

## 2.2. 色補正の欠如、未熟なクリーニング技術

**事例5**：部分使い衣料品をクリーニングに出したところ、革の部分の色が薄く色褪せた状態で納品された（写真5）<sup>7)</sup>

**申出**：子供のダッフルコートをクリーニングに出したところ、ポケット部分のかぶせに使用している革の色（黒）が青白く薄い色になり、色褪せた状態で仕上がってきた。また、革の風合いも革独特のしっとり感が無くなり、肌目がかさついて潤いがなく硬く感じる。このような風合いが硬化したことと元の色とは違うことを告げると、「本体の素材であるウール専用のクリーニングを行って汚れはきれいに除去できており十分な仕上がりである。革の色については革が悪いから色が剥げたのでどうしようもない。」と言われた。

元どおりの柔らかい風合いと元の色に戻してほしい。

**原因：**当該のコートのクリーニングを受け付けたクリーニング店は、自社に繊維製品専用のクリーニング工場を所有しているが、皮革製品は通常皮革衣料専門店に取り次いでいるとのことである。しかしながら、この商品に使われている革は部分使いで革の使用面積も小さかったので、自社でクリーニングができると判断した。通常のウールのコートの洗い方で洗浄し、汚れを完全に除去し、定法どおりに仕上げで納品したという。

皮革専門のクリーニングは、かわとはきもの (No.213) で述べたように、洗浄時に洗浄剤の中に加脂剤を添加することで、革に含まれる加脂剤と洗浄剤中の加脂剤の量が平衡になるようにし、革の柔軟性や風合い、色調等に極力影響を及ぼさないように調整しながら行われている。また、洗浄後には革の補修として、必要に応じて加脂剤や撥水剤の塗布、色合わせのための染色、あるいは塗装が行われている。洗浄後に、これらの補修が完璧に行われて初めて皮革のクリーニングが完成するのである。このため、これに対応するための高度な設備と熟練した技術が要求される。

皮革のクリーニングは、汚れの除去だけに留まらず、風合いと色の変化を極力抑えるために上述した手法で被洗物1点1点に対して様々な技術の組み合わせと工夫がなされているのである。

このクリーニング店では、当初の目的である汚れの除去はできたけれども、部分使いの革の風合いと変退色への対応ができていなかった。皮革というものの取扱いに対する基本的な知識の不足が招いた事故であり、顧客に対する信用を大い

に失った事故であった。

**対策：**革の部分使い衣料品は、一見、簡単に洗えそうに思えるが、皮革衣料専門のクリーニング店では、そうではなく、この種の衣料の取扱いが最も難しい類である。したがって、部分使いの革といえども、皮革の特性についての知識や経験が不足している状況下で安易に洗ったりしないことである。革を使っている場合は、皮革衣料専門業者に取り次ぐ(委託する)べきである。

**事例6：**クリーニング後、紳士ブレザーに部分使いされていた革の色が退色した状態で納品された(写真6)<sup>7)</sup>

**申出：**革が部分的に使われた紳士ブレザーをクリーニングに出したところ、部分使いの革の色(ネイビー)が青白く薄い色になり色褪せた状態で仕上がってきた。革の色は身頃とほぼ同じ色だった。また、風合いも悪くなったように思う。元の色に直してほしいとお願いしたが、「革の色についてはもともとこのような色であった」と言われた。

**外観観察：**このブレザーは、コーデロイ(コールテン)の身頃に右肩と両肘部分にカーフのヌバックが部分使いされた大変お洒落な商品である。申出者は、このブレザーが気に入っていたので、同時に同じものを2着購入していた。そこで、クリーニングに出していない方のブレザーを確認したところ、部分使いの革の色は本体(身頃)の色に非常に近い色をしていた。

**原因：**この事例もまた、皮革専門のクリーニング店に取り次ぎをせずに、繊維製品のクリーニングをしてしまった事例であり、事例5と全く同様の内容である。

**事例7：**スタジアムジャンパー（ベージュ）をクリーニングに出したところ、袖部分の革が赤く変色していた。（写真7-1）

**申出：**革製のスタジアムジャンパーをドライクリーニングに出したら、両袖部分のベージュの革が赤く変色し、ムラになって返ってきた。大切に使っていたが、1シーズン着用したので、皮脂や汗じみ、汚れを取り除いてもらいたくて専門店に出した。元どおりにして返してほしい。

**原因：**身頃は羊毛（赤）製で、両袖の部分が塗装仕上げ成牛革（ベージュ）製の異素材組合せ衣料であるスタジアムジャンパーで起きた事故事例である。革専用のドライクリーニングを行ったところ、ベージュの革が赤く汚染されたというものである。この衣料の構成は、身頃と袖は上記のとおりであり、裏地は綿製（赤）であった。この事例は以前本誌に掲載したものであるが<sup>8)</sup>、関連があるので再度掲載した。詳しくは、そちらを参考にしてほしい。ベージュの革に赤い色素が移染した例である。身頃の赤色の羊毛からの移染と考えられたが、結論として、綿製の裏地の赤い染料が溶出してベージュの革を汚染していた。

**対策：**企画・縫製段階では、裏地といえども、耐洗濯性や耐ドライクリーニング性について染色堅ろう度試験を行い、染色堅ろう性をよく確認をしておくこと。革部分だけをファスナーやボタン等で外すだけで簡単に着脱できるような工夫も必要である。クリーニング店では色の移行を防ぐために、革部分を取り外して洗うか、革部分を逆汚染しないようにガードして洗うなど工夫が求められる<sup>9)</sup>。実際に、部分使いの革を取り外して別々に洗い、最終的に元の状態に再縫製して仕上げている業者もある。スタジアムジャン

パーを革のパーツをすべて取り外して洗っている事例を写真7-2に紹介しておく。

**事例8：**革衣料をクリーニングに出したら、別の革衣料が納品された（写真8右側）  
2,3,4,5,6)

**申出：**レザージャケット（黒）をクリーニングに出したら、茶色のレザージャケットが納品された。納品されたジャケットをよく観察すると、デザインもサイズも同じであった。

受付時の記号番号とジャケットに添付してある記号番号を照合したところ、私のもに間違いはないようである。しかし、色が違うのでどうなっているのか不思議でクリーニング店に尋ねると、「お預かりした時もこの色であった。間違いはない」という回答であった。たまたま、このレザージャケットは、購入時に非常に気に入っていたので、無くならないうちと同じデザイン、同じサイズ、同じ色のものを2着購入していた。片方（写真8左側）はほとんど着用していなかったため、汚れておらず、今回はクリーニングには出さなかった。このレザージャケットを持ち込んで見せたところ、クリーニング店は驚き、結果的に、なぜこのように色を間違ったのかわからないと平身低頭であった。謝られても元には戻らないので、どのようにすれば元の色（元の状態）に復元できるか教えてほしい。

**原因：**このレザージャケットは塗装仕上げ成牛革製で、その色は同等品の色から判断すると茶色がかった濃いこげ茶であった（写真8の左側）。これがドライクリーニング溶剤によって、塗膜が溶出して黒の塗膜が取り除かれてしまった<sup>10)</sup>。その下の層に茶色の薄い塗膜があったために、

クリーニング後の補修作業の担当者は、このジャケットはもともと茶系の革であったと判断したものと思われた<sup>11)</sup>。

したがって、茶系の色素を用いて色の復元を行い納品したものと考えられた。クリーニング店における製品の色の管理が不十分であり、受付時に、色の確認、記録が詳細に行われていれば防げた事故である。

最終的には、クリーニング業者は、申出者のもう1着のレザージャケットを拝借して、その色に近似した色補正を行って納品し解決した。

**対策：**受付時、あるいは仕分け時に、革の全体像と色をデジタルカメラで記録すると同時にハンディタイプのカラーアナライザー（測色計）を用いて革の色を測定し数値化してデータとして記録する。最終工程である補修工程でこのデータに基づいて色の復元を行うシステムを構築する。色の管理を厳密に行うためには、現在、簡易的なカラーアナライザーは比較的安価で入手できるので、これの採用を勧める。もちろん、デジタルカメラによるデータ化も並行して行うことで色のトラブルを防ぐことができる。この方法を採用すれば、受付時に色だけでなく製品のキズや付属品、ボタンの有無など様々な情報を記録することができるので、預かった衣料の管理と工程管理にも有効である。

なお、メーカー側は革見本（小片）をタグのような形で内ポケットなどに縫い付けておくか添付しておくこと、このような事故は防げるものと思われる。

### 3. まとめ

今回は革の部分使い衣料—異素材組合せ衣料のクリーニングトラブル事例を紹介し

た。革衣料のクリーニングは何度も申し上げているが、クリーニング溶剤中に加脂剤を添加することやクリーニング後の後処理、すなわち、色の補修や風合い復活処理、再縫製などの技術や設備を必要とする。このような対応ができないなら、革衣料は部分使いにせよ、皮革専門のクリーニング店に任せることが必須である。皮革の特性や革の取扱方法について十分な知識も経験もなく安易に洗わないことである。

### 4. 参考文献

- 1) かわとはきものNo.189(2019)-No.214(2025)：東京都立皮革技術センター台東支所編
- 2) 稲次俊敬：革衣料のクリーニングセミナーテキスト, (2023)(一社)関西繊維商品めんでなんす研究会編
- 3) 皮革に関する応用講習会テキスト(2017)：皮革消費科学研究会編
- 4) 土田昭一：クリーニング業界が望む革衣料の品質：皮革技術, 91-95(1992)
- 5) 総合皮革科学, 238-240(1998)：日本皮革技術協会編
- 6) 新版皮革科学, 260-263(1992)：日本皮革技術協会編
- 7) 皮革ハンドブック, 357-358(2005)：日本皮革技術協会
- 8) かわとはきものNo.194,21-22(2020)：東京都立皮革技術センター台東支所編
- 9) かわとはきものNo.213,22-30(2025)：東京都立皮革技術センター台東支所編
- 10) かわとはきものNo.214,20-21(2025)：東京都立皮革技術センター台東支所編
- 11) かわとはきものNo.197,21-22(2021)：東京都立皮革技術センター台東支所編



写真1



写真2-1



写真2-2

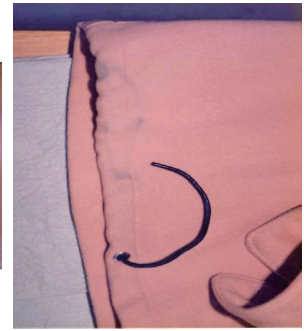


写真2-3



写真3-1



写真3-2



写真4-1



写真4-2



写真5



写真6



写真7-1

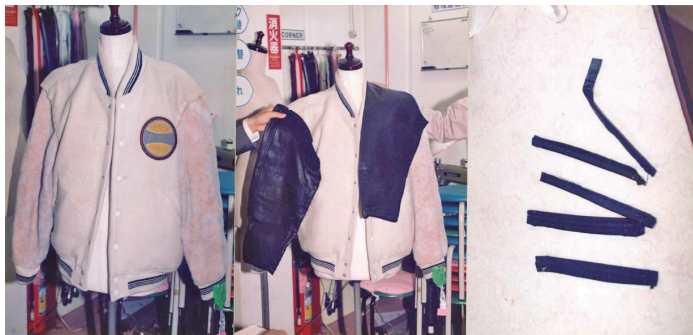


写真7-2



同等新品

クリーニング後の状態  
写真8